

認識論的实在論

——懷疑論と認識論の将来に関するウィリアムズの診断——

松田 毅

1. 懷疑論と認識論 「認識論の死は哲学全般にとって深刻な意味をもつ」(PK.241)

『不自然な懷疑』(UD)の著者であり、『懷疑論』(S)の編者であるマイケル・ウィリアムズは懷疑論の提起する認識論上の諸問題を真剣に考慮する現代の哲学者の一人である。彼は、現代の懷疑論を、その病理の「治療的診断」を通して解消しうる疑似問題としてではなく、むしろその諸前提の「理論的診断」を行うことで、知識の本性とその基礎に新たな光を当てる認識論の「不自然」ではあるが、真正の問題群と見なす。この見方は、一般に懷疑論が空疎な思弁と見なされ、またクワインやローティにより第一哲学としての「認識論の死」(GB.198.PK.240)が宣告されて久しい今でも、「懷疑論と認識論」という主題に哲学的魅力を感じる者には一考に値すると思われる。

もちろん、ウィリアムズ自身の認識論的考察は、『知識の諸問題』(PK)では懷疑論の診断の消極的主題を超え、「基礎づけ主義」と「整合性主義」とに代わる認識論の第三の道としての「文脈主義」の輪郭を積極的に描くことにも及ぶが、筆者はその最も重要な貢献が「認識論的实在論」(ER.418)の剔出にあると考える。というのも、彼の理論的診断によれば、認識論的实在論こそが、(その逆ではなく)きわめて先鋭な二つの形態の懷疑——[1]外部世界の知識に関するデカルト主義と[2]正当化に関する「アグリッパ問題」——を引き起こしたのであり、その難点を見定めることなしには、認識論に将来はないと考えられるからである。本稿ではウィリアムズのこのような見通しを踏まえ、認識論的实在論の射程を照し出すために、外部世界に関する「ムーア命題」(後述III)の正当化に見られる「認識論上のディレンマ」(RS.194.UD.19)とその解決の提案を焦点として考察を進めたい。

この種の常識が正しいことを基礎づけ主義も整合性主義もともに正当化できないために深刻な懷疑が引き起こされるというのが、ディレンマの意味である。こう考えるウィリアムズは、前者を、Ayerなどの論理実証主義者を念頭に、感覚与件に関する独立した「基礎的命題」を容認する、「論理的原子論」と「検証主義」との組合せ——「所与の神話」——として特徴づける一方、後者を、Blanshardなどの「観念論者」(UD.231)を念頭に「信念を他の信念なしに正当化するものは何もない」(RS.202)とし、その種の独立した基礎的命題

を認めない「全体論」として特徴づける。ウィリアムズの議論は、C.ライトの二論文(FC.SD)を手がかりにすることで見通しがよくなるので、以下ではその線に沿い、ディレンマが問題となるまでの経緯とその位置づけをスケッチすることから始めたい。

前もって注意しなくてはならないのは、ウィリアムズは第一哲学としての認識論を復活させたり、「延命」させる意図を持たない点である。そもそも認識論は、クワインの言う「宇宙的亡命」によってしか遂行されえないものではないし、懐疑論反駁だけを課題とするのでもないからである。そのように一面的に捉えられた認識論が否定され、その限りの課題が意義を喪失したとしても、認識論の課題がすべて消えるのではない。ウィリアムズが、認識論にゲティア反例に関連する知識の分析、「境界設定」、方法論、探究の合理性の問題を含め、それらが、認識実践の「評価」を要求する以上、認識論を心理学や認知科学に完全に還元する類の「自然化」は困難である点、つまり認識論の規範性を留意することを見れば、認識論の意義が失われるとは思えない(GB.199.PK.251.cf.Stroud.209ff)。

ただウィリアムズが懐疑論と認識論の歴史(cf.D.ST)と現在を精力的に踏査する中で深刻な懐疑論、認識論的ペシミズムの根源として認識論的实在論の着想に至ったことも確かである。そしてその考察の帰結として、彼は懐疑論とその反駁を課題とする近代的認識論のプロジェクトの文脈拘束性を指摘し、普遍的認識論の企てを放棄することを訴える。しかし、彼の考察は、懐疑論の主張が、その文脈の中では、例えば、SF風の仮説、「桶の中の脳」のように、いかにも不自然、人為的な仮定からなるとしても、一定の妥当性をもつことも否定しない。普遍的認識論の死が認識論の死を意味すると言うならば、ウィリアムズもそれを拒絶しないだろうが、それは認識論の定義の問題なのである。

最初に認識論的实在論の診断が懐疑論と認識論とのどのような問題連関から生じるのか、その輪郭を描いておきたい。彼の診断は問題解消ではなく、解決を図るものとして、伝統的認識論の問題を削除せず、その隠れた想定を見つけ出し、批判し、さらに知識に関する別の哲学的像を提示することを目指す。認識論的实在論とはまさにそうした隠れた想定に他ならないからである。

まず第一にこの实在論は「形而上学的实在論」(RS.193)と区別されなくてはならない。形而上学的实在論が、世界の外に立つ認識者としての、「客観的实在」を見て取る三人称的視点、つまり「神の眼」の可能性を想定した上で、实在の認識不可能性を提起しうのに対して、認識論的实在論は、認識論の内実を特徴づけるものとして、感覚、想像、推論、直観などの諸表象を本質的に優先されるべき特権的クラスとそうでないクラスに分け、さらに優先されるべき基礎的表象と他の派生的表象との間に、認識すべき「普遍的秩序」が、言い換えれば「自然種としての知識」(ER.419.UD.101)が存在するとし、問題のある表象の

クラスを認識の範疇から排除しもするのである。深刻な懐疑の元凶は、形而上学的實在論の客觀主義⁽¹⁾にではなく、むしろこの實在論が「客觀的實在に関する知識に先行する審級としての經驗的知識」を措定した(ER.434.UD.52.PK.189)点にあると、ウィリアムズは強調する。この点で彼は他の哲学者たちと見解を異にする。しかし、そうした普遍的秩序の假定なしには近代認識論がなかったことも確かである——デカルトの「コギト」、ロックの「單純觀念」の認識論上の重要な役割を想起したい。

第二に「認識論の解明すべき普遍的秩序」の想定は、現代哲学の、經驗的証拠とそれを説明する仮説・理論の間の不完全決定の問題と関連づけられる(PK.75)。われわれは実は培養液に浸され、コンピューター制御された、単なる脳髄ではないのか、という仮説が、デカルトの「悪霊」想定に近いことは言うまでもないが、そこで「現実の環境」と信念内容との因果的關係とは独立に、科学者や悪霊により完全に「現実そっくりに」シュミレートされた人物の信念状態を想定できるとき、確かに懐疑的仮説か實在的仮説かの選択が不完全にしか決定されない状況が生み出されると考えられる。実際、不完全決定が、「桶の中の脳」の例にとどまらず、他の懐疑的論証でもある中心的役割を果たすことは否定し難い。「事実についての知識の権利主張は、すべて証拠であると論証されるものによっては不完全にしか決定できない」(S.xi)という不完全決定の論拠は、外部世界に関する知識が蓋然的にとどまり、帰納推理が習慣でしかなく、他者が自動人形かもしれない、と囁く近代懐疑論の主張の底を一貫して流れているとウィリアムズは言うのである。

2. ケース1「夢論証」

次に認識論的實在論が二つのタイプの懐疑論のパズルでどう機能するかを見ておこう。[1]デカルトの夢論証のタイプと[2]正当化のディレンマのうち、[1]は方法的懐疑の初期段階に現れ、懐疑が自分の身体感覚に及ぶ徹底した懐疑の第一歩を構成するものである。そこでデカルトは炉部屋で椅子に座り、自分が手にもつ紙を眺めていることを反省し、今、自分が椅子に座り、紙を手につかんでいると、自分は知っていると言えるか、と自問自答する。そしてこれまで夢でしばしば幻影に欺かれたことがあるので、目覚めた状態と眠りとを明晰に区別する確かな証拠がないことが、自分には分かると言う。こうして「外界に関する知識」を信じる十分な理由を自分がもたないことにデカルトは気づく。

「もし彼が自分が炉の側に座っているのを知っているはずなら、彼は自分が炉の側に座っているのを夢で見ているのではないことを知らなくてはならない。彼の環境世界について何かを知るための必要条件は充足されない」(Stroud.12)。

この論証は、われわれの環境世界に関する無知、外部世界に関する深刻な懐疑の結論導

出として解釈され、ライトの用語では「反可能性原理」と「デカルトの原理」により再構成される(SD.91ff)。これが[1]の問題点を浮き彫りにするので、まずそれを見ておこう。

反可能性は次のように定義される。「Q は P と両立しない論理的に可能な命題であり、P も論理的に可能な命題とする。このとき P であり、かつ Q が P の反可能性である、と私が知っているなら、Q でないのを私は知っているが導かれる」。また「デカルトの原理」は「命題 P を知るためには、P を知るためにそれが必要であることを知っている何らかの条件が充足されているのを知らなくてはならない」ことを要求する認識論上、典型的な内在主義の原理である。こうして論証は以下のように書かれる。

(Q) デカルトは目覚めて、部屋着を着て炉の側に座っている。

(P) デカルトはその時ベッドに横たわり夢を見ている。

ここで(Q)と(P)とは相互に両立しない「反可能性」であるから、

- (1) Q であるなら、 $\neg P$ であることを私は知っている。(「デカルトの原理」によれば)
- (2) $\neg P$ であることを私は知らない。(そこで否定の推論式を介して)
- (3) ゆえに Q であることを私は知らない。

この不合理な帰結を避けるために、上の二原理と「既知の論理的含意における閉包(closure)」について、それぞれ問題検討が行われてきたことはよく知られている通りである。この論証は「知っている」を K で表すと、以下ようになる。

$$K(Q \supset \neg P)$$

$$\neg K(\neg P)$$

$$\therefore \neg K(Q)$$

これに対してウィリアムズはデカルトの原理の内在主義を否認する認識論的外在主義(cf. Heil)を取り、かつ閉包を制限しないという立場を取る(UD.ch.8)。後者については「知る」の文脈依存性に基づき「関連性」の観点に立つドレッツキ(Dretske.1970)や、この世界から「遠い可能世界」では知識の「跡づけ」ができないとするノジックらがその制限を行うのと対照的である。そのことで彼はナーゲリなどの認識論上の「ペシミズム」(UD.ch.1)を乗り切ると同時に、懐疑論にも懐疑論の文脈を前提した場合の妥当性を認める立場を取る。これは、認識論の普遍性要求——懐疑的仮定でも日常的認識でも同じ基準で真理値が決定できなくてはならない——の放棄を意味するが、ウィリアムズが特に問題視するのは、[1]では信念内容と環境との因果的・外的関係が無視され、命題の意味内容の含意だけが優先される点である(UD.349)。なぜならこれを許すのが認識論的实在論だからである。

[1]の論証を妥当とするのは、先述の二原理および不完全決定と否定の推論式であった。しかし、デカルトの原理をはずし、外在主義を取り——ウィリアムズは外在主義と信頼性

主義との完全な同一視を避けている(UD.319)——、命題Qを優先すれば、その帰結は必然的ではない。つまり認識論的實在論が措定する「自然種としての知識」と外在主義が承認する「知識」との区別を認めるなら、例えば子供が、自分では「なぜか」理由を説明できないが、大人が観察する限り、ちゃんとはさみを使いこなせるとき、子供はその使い方を「知っている」と言ってよいのである。もちろん、外在主義が知識に「スキル」(PK.166)を含めることで、「正当化された真なる信念」という標準的知識概念を改変することにならないか、という問題も生じる⁽²⁾。しかし、不自然な懷疑がもたらす深刻(滑稽)な帰結を避けようとするれば、外在主義の要因を含むことが一つの選択肢であることは間違いない。

一見したところウィリアムズの解決策は、『懷疑論』に収められた「会話進行の規則による前提の調整」(Lewis)や「関連する選択肢の文脈相対的なシフト」(Dretske.1981)の「語用論的アプローチ」とあまり異ならないが、彼は、懷疑論と外在主義的認識論の勝負のいわば「痛み分け」を率直に認め、外在主義の要素を優先しつつも、それぞれの権利を制限付きで認める。それが彼の「理論的診断」である。こうして認識論の普遍性要求を捨てた文脈主義と知識と環境との関係を重視する外在主義とを結合しながらも、正当化自体は切り捨てず、後述の「認識的責任」と「適切な理由づけ」の概念(PK.161ff)を導入することになるのである。こうして彼の描く認識論の像は、複雑で一種のパッチワークのように見えるが、その点は後に触れることにしたい。

3. ケース2「アグリッパ問題」

[2]正当化の「認識論的ディレンマ」に移ろう。ウィリアムズはこれを、正当化の無限後退をどう断つかという、古代懷疑論の「アグリッパ」問題の例として位置づける。ここでも彼が提案するのは、理由から理由へ悪無限に後退するのを妨げる認識論上、基礎的な信念があると考えた認識論的實在論の誘惑の放棄である。この悪循環こそ[1]の閉包の論点と対比されるべき[2]のムーア命題の問題を特徴づけるのであるが、ここでも認識論的實在論の隠れた想定が問題となる哲学的懷疑を引き起こすのである。ライトは、まず[2]の例として他人の心の懷疑論が[1]との類比で捉えきれない点を指摘する⁽³⁾。

OT「時点tに他の意識がある。」J「ジョーンズがtで痛みをもつ。」K「私はtでPが真であることを知る。」R「信じる十分な理由がある」とする。このときライトは他人の心への懷疑の論証を次のように定式化する。括弧内はライトのコメントである。

A' $\neg OT \supset \neg K(J)$ (これは例外なしに真である。そこでより弱いRを用いる。)

A'' $\neg OT \supset \neg R(J)$ (OTの強力な証拠に反対するが、論点先取の誤謬を犯している。)

B' $R(J) \supset R(OT)$ (B'が真となるには $R(J \supset OT)$ と送達＝閉包が必要である。)

$C' \rightarrow R(OT)$

懐疑論者は C' を必要とし、これが[1]の $\neg K(\neg P)$ と比較可能な論拠である(FC.431ff)。しかし、この場合、デカルトの自動人形の想定のように、 C' を認めても、経験は全体として今まで通りでありうる。その点 C' の可能性を否定する強い証拠はない。とはいえ逆に C' を想定すると、強力だが決定的とは言えない多くの証拠に関する通常の観念が不整合になってしまう。そこでライトが見るところ[1]のように決定的には結論は帰結しない。これが第一の論点である。

* $D' \rightarrow R(OT) \supset \neg R(J)$

[1]の場合は、通常の知覚と私がその証拠を直接利用できない非認知的可能性として「今、私は夢を見ている」の仮定との間の不整合が契機となり、通常の説得的な信念 Q が阻害されたが、[2]ではそれと異なり、痛みの振る舞いのような認知可能な証拠があり、しかもそれは肯定的にも否定的にも働くという違いがある——ウィリアムズはここに不完全決定の主題を見出す。ライトは過去や物質世界に関する懐疑——現象論や構成論にはその種の懐疑が内在する(cf.ER.425)——も[2]に属するとし、それが通常の知識主張と両立しない点を確認する。まさにここにムーア命題（以下のIII）が位置するのである。実際、ムーアの論証は、[1]と形式的には対照的である。

(1) Q であるなら、 $\neg P$ であることを私は知っている。

(2) Q であることを私は知っている。（肯定の推論式に従えば、）

(3) ゆえに私は $\neg P$ であることを知っている。

一般に(2)のために直接知覚の確実性を持ち出すムーアは「独断的」で同語反復を犯し、何も懐疑論に應えていないと反論されてきた。これは直観的に明らかである。しかし、懐疑論に反対して、ムーアは以下の命題IIへの確信を担う何らかの原理に依拠するか、懐疑論の前提に反対するそのような確信に戻るべきと考えたというのが、ライトの解釈の第二の要である。つまりムーアの論証で重要なのは、(2)に当たるIIの独断的主張ではなく、それを導くIからの推論だということである。

I ムーアの経験の領域全体を適度な詳しさに記述する命題——手を挙げるときその前にあるもの——それが聴衆に対して哲学的論点を証明する。

II 私は手を持っているのを知っている。

III 私は外部世界が存在することを知っている。

そしてIからIIIIIへの移行の性格を明らかにするため、二つの推論モデルが挙げられる。

[A]1.四時間前にJが二〇個のベラドンナを飲んだ。2.Jは体内に致死量のベラドンナを摂取した。3.Jはほどなく死ぬだろう。

[B]1. Jは二つの白い柱の間にボールを蹴った。2. Jは得点した。3. サッカーの試合が行われている。

[A]の場合、1は3を含意する2のために十分だが、反証可能かもしれない（科学的）論拠を記述しており、1により2のために与えられる理由にも閉包が成立する。1と2の関係は、二つの場合、同じであるが、[B]の場合、1と2の間の支持関係が成立するためには、まず先行して3を受け入れることが合理的である点異なる。1が3を確証するとしても、（そのためにはより多くの情報が必要であるから）確証自体は偶然にとどまる。

このように二つの推論モデルでは証拠と仮説の関係が違う。ではムーア命題と証拠の関係はどうか。ムーア命題IIIと命題IIとの関係が仮説と証拠の関係に当たることは確かであるが、IIIの合理性とIIIのIIによる支持関係の様態の適切な説明が問題なのである。そしてここで指摘しなくてはならないのは、ムーアが暗にそうしたようには、IからIIIIIへの確証はなく、[B]と同様、先行的にIIIを承認する場合しか、IがIIを支持する傾向がないことである。しかしIIIの証拠がどう集められるかは全く不明である。IIIの直接証拠は知りえず、間接証拠もC'の想定のように懐疑論により排除されるから、III自身は何の証拠ももたない。したがって懐疑論者はこう論証できる。

(a) 物質世界に関する個々の命題のためにわれわれがもつあらゆる証拠は、それを支持するものとして命題IIIを受け入れることが含む先行的合理性に依拠する。

(b) この理由のために、IIIはそうした証拠に訴えることによって正当化されえない。

(c) IIIはそれ以外の仕方では正当化されえない。

(d) IIIは偽であるかもしれない。

これは人を当惑させる事態ではあるが、ライトはムーア命題のこうした理解には「誤解」があると考え。その誤解とはIIIを「事實的」命題と見なすことであるが、その点に懐疑論者も批判者も気づいていない。そこでライトはウィトゲンシュタインの『確実性について』の「蝶番命題」の議論を持ち出すのである(UD.157.FC.449ff)。今その解釈の詳細を扱う余裕はないが、ウィリアムズの認識論的實在論の着想とライトの見方はそこで重なる。そしてライトはこの種の懐疑論を退ける幾つかの提案を検討し、それぞれの限界を指摘するが、ここではアグリッパ問題とムーア命題との関連に絞り、ごく簡潔に要点に言及するだけにしたい。

まず規準論は、(a)を拒否し、その関係を「規約」と見なすが、規約はあくまで規約かドクマにとどまるので、そこにアグリッパ的懐疑を退ける知識はない。また、検証主義は、IIIが検証を超えた内容を欠く無意味な仮説であるとし、この懐疑を無意味化させようとするが、検証主義が問題を検証可能性の枠で展開する限り、検証主義自身がディレンマに陥

ることは避けられない。IIIを前提とする通常の検証が疑われ、また検証とは何かに関する共通の知識が不在となる可能性が指摘される。

さらに知覚の非ベール説は、(a)を拒否し、I IIの直接知を主張し、I II IIIの枠組み自体を捨て、整合性を足場にした異なるタイプの認識論を構成するが、ここでは二階の懐疑が成立する可能性、つまりこの非ベール説自体の正当化が疑われる余地がある(cf.GB.192ff)。最後に、ストローソンの「自然主義」ではIIIを現象説明のための（人間精神の共通性や自然の斉一性と同様に）、それに代替するもののない「最善の利用可能な説明」として準科学的に論証するが、IのデータをIIとして受け入れるためにIIIを仮説として認めることは、そのために「帰納に関する懐疑」を招き寄せる。結局、そこでも(a)を前提とせざるをえず、再びIII'として「未来は過去に似るだろう」の正当化問題が残る。

ここでウィリアムズは、IIIを先行する基礎的命題と見なし、さらにそれを正当化可能なものとする限り、つまり認識論的实在論を取る限り、袋小路から抜けられないと言うだろう(cf.UD.200)。彼は、近代認識論のディレンマの根源を、整合性主義の場合は、基礎的信念の文脈依存を強調する余り正当化が単に弁証的で、信念が外的関係を失う危険性を孕む全体論に認める一方、基礎づけ主義の場合、IIIのタイプの命題に「内的信頼性」を与えることのできない論理原子論想定と検証主義に認めるからである。

ここでウィリアムズの見解を理解する上で注目すべき点は、IIIを準規範的命題として解釈する方向を示唆するライトが、ウィリアムズの最初の著作『根拠のない信念』の反基礎づけ主義を全体論として理解し、それがディレンマの片方の角に引っかかると指摘した点である。信念の全体によってのみ正当化を語るなら、その全体が真であることを正当化する根拠としてはその信念全体以外にない悪循環が生じ、その全体が「世界の上に浮遊する」と批判したのである(FC.463.GB.193)。

これに対してウィリアムズはライトの反基礎づけ主義理解には誤解があると反論する。ウィリアムズの場合、反基礎づけ主義は、世界に関するわれわれの知識を「ひとつの全体として問う伝統的問いの理論的諸前提を疑う試みであり、正当化の整合性理論も認識論的实在論への別の形式の固着を表現している」(ER.438.n.44)からである。したがって、ウィリアムズは基礎的信念の候補であった「感覚与件」を、それを解釈する信念や言語と独立に扱うことの困難を説得的に示したクワインの「自然化された認識論」やデイヴィッドソンの「真理整合説」などに依拠して基礎づけ主義の難点を確認する一方、整合性主義による正当化が普遍化され、「实在との摩擦」のような外的拘束を失わないために、正当化の含むべき外在性と同時にその文脈性を強調するのである。しかし、このような解決策はディレンマを避ける第三の道のパッチワーク的折衷主義の印象を与えるものだった。

4. 第三の道：‘The Humean condition and human condition are not the same.’(UD.359)

ウィリアムズは、第三の道としての文脈主義の正当化をセラーズ-ブランダムの「欠陥と挑戦」(PK.150ff)に対して理由を与えるゲームのモデルにより構想する。これに関する見通しを述べ、最後の印象が払拭されうるか、私見を述べて本稿を閉じたい。

ウィリアムズは、「知る」が「知識を理由の論理空間に置いて正当化できる」を意味するという主張に同意し、そこに認識的責任と適切な理由づけの二条件を加える。前者は責任ある人物が所与の命題を信頼できる方法で形成することを、後者は命題が真であると信じさせる適切な理由を挙げうることを要求するが、正当化は、この二条件に関して、欠陥を指摘しようとする挑戦を跳ね返す言語行為——そこに知識の自己修正の契機がある——と見なされる。もちろん、認識論的實在論を捨てる以上、この正当化は基礎的信念を前提とし、アグリッパ問題を招く「先行理由の要件」に従うものではない。しかし、経験的証拠の概念が全く無効になるのではなく、ムーア命題が循環なしには証拠をもたないとしても、それを主張する権利がそれで奪われるわけでもない(PK.156)。挑戦者が出現しない限り自明なこの命題は、いったん欠陥が問題視されると、物体の存在証明や構成論のような哲学的正当化の試み——その成否はともかく——を生み出すが、それを否定すれば、いわば「礼を失し」(cf.UD.154)、社会的な認識実践に支障を来しかねない「想定」として規範的「拘束性」をもつ。この命題の独自の身分を救出しうる利点をもつ限り、第三の道を単なる折衷主義と呼ぶのはやはり躊躇されるだろう。

ウィリアムズによる懐疑論の哲学史的理解の妥当性、現代の他の認識論との比較検討、「真理と正当化の連関」の問題解明(Habermas.247)などの論点の十分な検討は今後の課題とせざるをないが、懐疑を、人間の致命的病理、条件とするのではなく、近代の普遍的認識論のプロジェクトの副産物、「ヒュームの苦境」として限界づける文脈主義的認識論には第三の認識論の少なくとも指名候補のひとつとなる資格があると、筆者は考える。

[付記] 本稿を 2001 年から三年間の京都大学文学部での『懐疑論』演習の中間報告とし、参加された学生、院生諸君への感謝に代えたい。

註

- (1) 懐疑論の元凶を意味論的实在論に見るクラーク(Clarke)への批判も参照(UD.191ff)。
- (2) 正当化について二点で拡張された知識の標準的定義を保持しようとするウィリアムズは、真理については「デフレーション説」に立つ(Williams.2002)。
- (3) ライトは[1]については、内在主義と外在主義の懐疑論反駁がともに不十分なこと、逆に懐疑論も自己正当化を行えないことを、二階の懐疑論も含め、閉包、つまり送達と内在主義的な重積を操作子として含む認知論理を用い精緻に論証している(SD)。送達は「 $R(P \supset Q) \& R(P)$ なら $R(Q)$ 」、重積は「 $R(P)$ なら $R(R(P))$ 」と表現される(FC.431ff.471.n1)。

文献

紙幅の都合で最小限にし、略号を使用した。関連論文は(S)にほぼ採録されている。

- Clarke. T, 'The Legacy of Skepticism', *The Journal of Philosophy*, 1972.
 Dretske. F, 'Epistemic Operators', *The Journal of Philosophy*, 67, 1970.
 ——— 'The Pragmatic Dimension of Knowledge', *Philosophical Studies* 40, 1981.
 Habermas. J, *Wahrheit und Rechtfertigung*, Frankfurt.a.M, 1999.
 Heil. J, 'Doubts about Skepticism', *Philosophical Studies*, 51, 1987.
 Lewis. D, 'Scorekeeping in a Language Game', *Journal of Philosophy of Logic*, 8, 1979.
 Stroud. B, *The Significance of Philosophical Scepticism*, Oxford, 1984.
 Williams. M, *Groundless Belief. An Essay on the Possibility of Epistemology*, Princeton, (1977), 1999(GB).
 ——— 'Descartes and the Metaphysics of Doubt', *Descartes*.ed.Cottingham.J,Oxford, (1986) 1998(D).
 ——— 'Epistemological Realism and the Basis of Scepticism', *Mind*, 97, 1988 (ER).
 ——— 'Scepticism without Theory', *Review of Metaphysics*, 41, 1988(ST).
 ——— 'Realism and Scepticism', *Reality, representation, and projection*.ed.Haldane.J&Wright.C,Oxford, 1993(RS).
 ——— *Scepticism*, Dartmouth, 1993(ed.)(S)
 ——— *Unnatural Doubts Epistemological Realism and the Basis of Scepticism*, Princeton, 1996 (UD)
 ——— *Problems of Knowledge*, Oxford, 2001(PK).
 ——— 'Epistemology and the Mirror of Nature', *Rorty and his Critics*, ed.Brandom.R.B, Blackwell, 2000.
 ——— 'On Some Critics of Deflationism', *What is truth?* ed.Schanz.R, de Gruyter, 2002.
 Wright. C, 'Facts and Certainty', *Proceedings of the British Academy*, 1985(FC).
 ——— 'Scepticism and Dreaming: Imploding the Demon', *Mind*, January 1991(SD).

[神戸大学教授]